神戸っ子　昭和40年1月20日第三種郵便物認可　昭和44年7月1日印刷　通巻99号　昭和44年7月1日発行　毎月一回

THE KOBEKKO
NO,99 JULY 1969

★郷土を愛する人々の雑誌★

神戸っ子

7

MIKIMOTO

胸もとに
さわやかな気品をそえる
ミキモトパール
あなたの美しさを
いっそうひきたてます

御木本真珠店

神戸店＝三ノ宮―神戸国際会館
Tel. 22―0062
大阪支店＝堂島―新大ビル
Tel. 363―0247
京都支店＝河原町御池上ル
Tel. 241―2970
京都＝京都ホテル・京都国際ホテル
大阪＝阪急・阪神・高島屋・松坂屋
本店＝東京―銀座４丁目
Tel. 535―4611

©1969－7

日々

白い日々の夏が
風にめくれる
顔を出すのは知らない顔
どこかで見た見覚えのある顔

そのどれもが
泡のようにはじけて消えた
知らない顔も
見覚えのある顔も
ゾッとするほどの
死顔を見せづじまいだった
明日は
またこんなふうにやってくるのか

絵＋詩／津高和一

＊現在はあじさいが最も美しい季節です。
＊ジンギスカン料理が美味しくなる季節です。
＊神戸っ子の集うホテルです。

六甲オリエンタルホテル (078) 89－0333

●神戸っ子'69——有吉道夫〈将棋士・八段〉

カメラ・米田定蔵

春雷が鳴って降雨。盤上での将棋の駒が沈黙を誘う。体をよじって脇息にのしかかり、闘志を発散させる。

有吉道夫。15才にして棋界に入り、29才で八段。この4月から名人戦で大山康晴名人と対局。倉敷の大山家に4年間内弟子として生活した有吉八段にとって、晴れの師弟戦。心技両面にわたって傾倒している名人に対して一個の勝負師として駒を交した。

勝負は頭脳が招くのですよ、と穏やかに語る有吉八段も盤に向ってだけ必死の形相を見せるが、この棋風は好感がもたれている。

33才。岡山県生まれ。最近、神戸から仁川に転居。

〈写真左・仁川の自宅にて、写真下・名人戦第一局先勝の瞬間〉

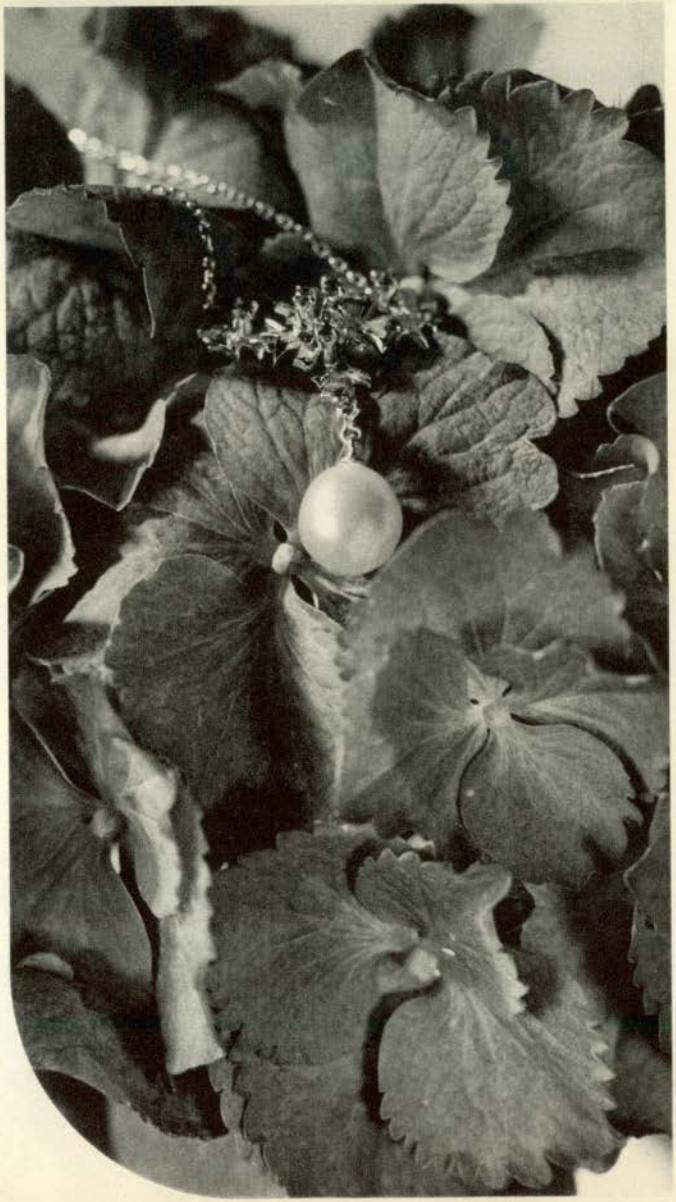
あなたの佳き日に

タサキ・パール

田崎真珠

本　　社・神戸市葺合区旗塚通6－9
神　戸　店・神戸新聞会館秀品店内
銀　座　店・東京都中央区銀座西6－5
ヒルトン店・東京ヒルトンホテル内
オータニ店・ホテルニューオータニ内
タサキパールギャラリー・東京都港区赤坂1－3－17
札　幌　店・札幌パークホテル内
パールファーム神戸・神戸市灘区六甲台町24
細　工　工　場・東京都町田市野津田町暖沢前3226
養　殖　場・長崎県・佐賀県・熊本県・島根県・山口県・奄美大島

あなたの真珠はパール・マークのお店で
日本真珠小売店協会加盟店



TASAKI PEARLS

●神戸っ子'69——

永田克子〈歌手〉

カメラ・米田定蔵

赤い花が咲いてたっけ、あのふるさとの丘に……

泡だつ須磨の渚に夏の陽が深く透る。口笛が砂をなでる

永田克子。アメリアッチ調の歌で東芝から三年前にデビュー。関西テレビの〈ハイ！土曜日です〉で、かすりゃ姿の〈赤い花のふるさと〉を歌い好評を博する。可憐な表情とジャズのフィーリングを生かしたこの歌は、ふるさとを失った現代人の心を巧みにとらえた。

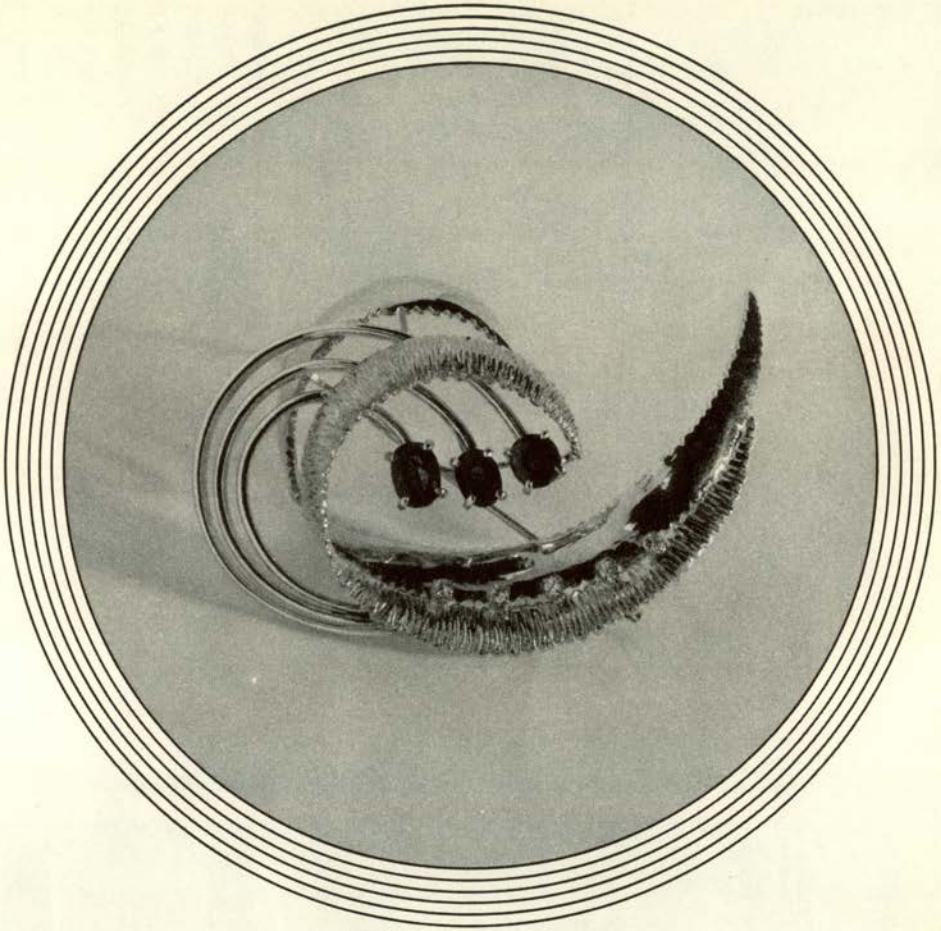
仕事の間隙をぬっての須磨の海で、彼女は童心に戻り大きく胸を張って深呼吸をした。ラジオ・テレビで遊ぶ暇のない彼女にとって、大きな休憩となったであろう。

神戸生まれ、神戸女子商業高校卒。本名、長田勝子。

〈写真左・須磨の海で　写真下・桂米朝さんと関西TVスタジオにて〉

確信を持って

タジマの眼が選んだ宝石の名品



Tajima ・・宝飾店

＊＊＊宝飾店 タジマ 元町2・TEL ㉝ 0387・2552

K18, WG, ブルーサファイヤ・ダイヤ・ブローチ・帯留兼用

★タジマでは、宝石の鑑定を無料でご相談に応じておりますので、お気軽にご相談ください

★ある集い★

現代俳句グループ
渦

市内とはいっても山と畑にかこまれた神出多井「樅の木学園」。今日、五月十一日母の日。「渦」の会員およそ二十名も探訪会として当学園を訪問、二時間の見学を兼ねた散策のあと、新装なったコロニーで句会を催した。

当学園坂下園長も「渦」の会員である。

「渦」が生まれて十年。さかのぼればその源を「一枚の手帳」に発し、「坂」を経て、「渦」の発足をみ幾多の苦難の時代を経験して今日にいたる。それは、あたかも辺境の沼から発したせせらぎが溪谷をぬいながら支流をさそい、やがて豊かな水量をえた奔流となり、澎湃として巨岩に激し、ほうはくしてやむことのない巨大な渦となるのにたとえられている。主宰者というより、「渦」とは一心同体の間柄にある赤尾兜子氏は、すでにその名を全俳壇にとどろかせ、神戸の生んだ稀有の作家として光彩をはなっている。

渦をすぎれば、いずれはゆるやかな下流に辿りつくだろう。しかし、「渦」グループはあえて渦にとどまり、滔々たる流れを巻き込みより巨大な渦に成長しようとしている。

（写真右から）
出井知恵子　和田悟朗　武呂年子　大河双魚　寺沢光子　寺田もとお　青江蓙江　赤尾兜子　三宅三穂　島村美美子（一人おいて）板垣鋭太郎　掲枝佐知子　三宅町子（一人おいて）赤尾忠似子

かねこ

パニ＊サロン

＊夏のパール

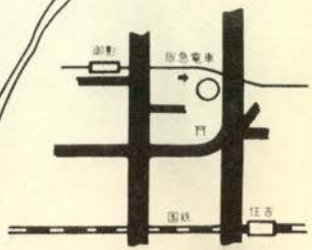
小麦色の肌が美しい夏。
今までのように真珠の優雅なイメージを求めるだけでなく、ほんとにおしゃれな方なら、陽焼けした素肌にパールを飾ってはいかが？
海の宝石の輝きが、あなたの素肌に生き生きと、自然の美しさを発揮します。フレッシュなパールの魅力をこの夏におためし下さい。

おしゃれをリードする……

KANEKO PEARL

金子真珠

神戸市東灘区住吉町堂ノ本1824
TEL (81) 2881～3



●コウベ・スナップ

情緒豊かな花隈公園

花隈城趾公園は、夏を迎えて新緑と水が生きてきた。

石垣は昔日を偲ばせる花崗岩と丹波石で、緑に染まる石垣が神戸の市街地にそびえ、近隣公園として市民の憩いの場となった。

公園の下は花隈駐車場で、自道ランプ式三層構造で、二八〇台が収容できる駐車場の利用も盛況だが、今夏は情緒豊かな花隈公園が、坂道の公園として、山と海の見える公園として大いに利用されることだろう。

水の東遊園地と共に神戸の新たな名物となるであろう。

村田＊真珠／銀座山岡＊毛皮／船来婦人服飾

レ・ラタ

さんちか＊レディスタウン・TEL 39-3886～7

有限会社・タイグレス

神戸店・神戸市生田区山本通り4－97
村田真珠本社内TEL (078)23-1212～6
東京店・東京都中央区銀座8－2
山岡毛皮店内TEL (03)572－0021～2

パリのおしゃれな
コレクションが
夏のあなたを
創ります

これは神戸を愛する人々の手帖です
あなたのくらしに楽しい夢をおくる
神戸を訪れる人々にはやさしい道しるべ
これは神戸っ子の手帖です

●7月号目次

表紙―小磯良平／構成・石阪春生 ―― 1
Second Cover／津高和一 ―― 3
神戸っ子 '69／撮影・米田定蔵 ―― 7
①水田克子・②有吉道夫 ―― 9
ある集い／「渦」 ―― 13
コウベ・スナップ／情緒豊かな花隈公園 ―― 15
わたしの意見／原口梅子 ―― 18
随想三題／魚のことなど・井上喜平治 ―― 21
現代彫刻と古典・新谷映子 ―― 29
港のこと・友岡子郷 ―― 35
ある集い・その足あと／「渦」 ―― 36
れんさい随想〈2〉北野町哀愁・林田重五郎 ―― 37
随想／牡丹島・山本大慈 ―― 39
随想／神戸心象雑景・野口武彦 ―― 41
神戸るぽ／須磨の登網 ―― 42
経済ポケットジャーナル ―― 44
神戸のアーバンデザイン／水谷頴介＋ ―― 46
神戸のモダーンリビング／チームUR ―― 49
技術ジャーナル／諸岡博熊 ―― 54
オートバイ旅行記③／大迫嘉昭 ―― 59
CINEMA ㊵ 淀川長治 ―― 70
神戸遊戯誌㊿／ソフトボール(2)青木重雄 ―― 77
神戸の集いから ―― 86
街のおしゃべり／須磨 ―― 90
動物園飼育日記㊳／亀井一成 ―― 92
ある日のモード〈7月〉・福富芳美 ―― 94
グラビア写真集／御崎球技場を湧かせた日英交歓サッカー ―― 101
神戸百店会特集座談会／神戸の女性の魅力を語る ―― 102
元町タウン・ジャーナル〈7月〉 ―― 106
ムッシュー・ド・コウベ・田中健一郎／竹田洋太郎 ―― 116
連載マンガ／かん詰めをあけろ①・岡田淳 ―― 125
へんなページ⑦／向井修二 ―― 128
神戸百店会だより ―― 128
ポケットジャーナル・花時計 ―― 129
連載物語第22回・非悪童物語／足立巻一 ―― 129
連載小説／兵庫の女〈41〉武田繁太郎 ―― 129
海・船・港⑦エビタシオ号をたづねて ―― 129
カメラ歳時記〈7月〉**団地のある丘** カメラ／緒方しげを ―― 129
カメラ／米田定蔵・カット／岡田淳 ―― 129

住宅シリーズ①

六甲S邸 完成4月

●外部、室内は白リシンカキ落しで仕上げ、室内は広く、おちつきのあるムードの照明器具で効果をだしている。

MOTODEN
舶来ムード 照明の店
モトデン
本社★神戸市生田区元町6丁目26-4196
工場★神戸市葺合区琴緒町1ノ10-28947

光のパイオニア

企画から開店まで
アイデアの
神戸日建
建築設計施工 店舗改造
神戸市生田区中山手通3丁目
PHONE 22-7172・6052

KOBE NIKKEN

★わたしの意見

20周年に街を飾る ポート・フラワー

原口梅子
<神戸フラワーソサイティ会長>

★花時計に象徴される花の街・神戸

神戸を訪れる方、また神戸に住んでおられる方にとって、花時計が神戸の新たな象徴になってきております。恋人たちのデートの場として、家族の憩いの場として生まれかわる神戸の街を、花時計はこの12年間見守ってきました。この花時計は、神戸フラワーソサイティが高松宮両殿下のご臨席のもと、昭和32年に神戸市に寄贈したもので、当初、場所の選定でいろいろ意見がありましたが、結果的に一番良い場所に決まり、文字通りフラワーロードを飾り、皆さんに存分にご利用していただき、よろこんでいる次第です。

戦争で荒廃した街を花で美しく飾ろうと、神戸市緑化協会の一翼として神戸フラワーソサイティが設立され、来年が20周年にあたります。その間、昭和26年には太平洋市長会議が神戸で開催され、国際港都・神戸にふさわしいおもてなしを、と考えだされたのが花のプリンセスです。過去19年にわたって、街を豊かな国際色で彩り、国際親善に寄与していただいたプリンセスの方々には、神戸の街をあげて感謝したく思っております。

★20周年を飾りたい、神戸のポート・フラワー

花時計にしても花壇にしても、最初は心ないいたずらがありましたが、この頃は市民の公徳心が向上して、各家の花壇から街の花壇へと見なおされ、かえって市民の公徳心を育てる結果を生んでおります。

20周年を来年に控え、神戸フラワーソサイティはより充実をはかるべく、若い世代の会員、ならびに男性会員をふやすことに努力して、強力な実行団体となりたく思っております。この20周年を期して、ミナト神戸にふさわしいポート・フラワーを決め、街を大いに飾ることはいかがでしょうか。フラワーソサイティのマークにはバラがついており、私自身もあの豪華なバラが好きなのですが、六甲の紫陽花にせよ、つつじにせよ、神戸の象徴ともいうべきポート・フラワーで、街を飾り、学校を飾り各家庭を飾る日が待遠しく思われてなりません。

新製品

本場ドイツからやって来ました！

バウムクーヘンの本場ドイツハンブルグのオットーヘミングという店で私が作っていたものとまるっきり同じ味ですどうぞ一度召し上ってみて下さい。

——ホルガー・トムセン

フランス菓子

ベル

神戸本店　33－0021・
三地下店・大阪店・
甲子園店・豊中店・六甲店

YAMATOYA SHIRT CO
Trade Mark

紳士シャツ専門店

大和屋シャツ

7月1日
国際店
オープン！

紳士シャツ専門店の大和屋シャツがカスタムシャツのあり方を充分研究して、新しいアトリエを神戸国際会館館１Ｆに開店いたしました。センター一街店同様お引立てください。

★

カスタムシャツのアトリエ
大和屋シャツ　国際店
神戸国際会館１階　ＴＥＬ25－0220

紳士シャツ専門店
大和屋シャツ　三宮店
三宮センター街　ＴＥＬ 33－6956

随想三題

魚のことなど

井上喜平治
〈神戸市立須磨水族館長〉

先日〝かるもプール〟の竣工式に招かれた。そしてアトラクションで、中学生や高校生達の力泳振りを拝見したが、実にみごとであった。しかし私はこれを見ていて果してこの泳法が自然の海や川で役立つか疑問に思った。私の子供の頃はクロールも習ったが、観海流とか色々な流儀があった。そして平泳の他、抜き手とか立ち泳ぎ等も習って、大きな波とか激流を渡る泳ぎ方も身につけたが、対象はすべて自然であった。

これについて思うことは、アユを釣るのに友釣という漁法がある。それは友となるアユ？を生かしたまま釣糸の先につける。そしてこれに寄って来るアユを、針にかける漁法である。この漁法はもともと天然の川で、アユがお互に縄張りを作って生活している所に釣竿につけたアユを入れると、川にいるアユは、自分の縄張りが他のアユに冒されると思い、盛んに攻撃をかけ、予め企まれた針にかかるのである。友釣のアユは常に釣竿の先で振られるため、元気でよく泳ぐアユがよい。友のアユは普通、川から獲って使うが、時には養成のアユを使うことがある。釣師は養成物は駄目だという。理由は活潑に泳がず、すぐ弱るので役に立たぬという。思えば無理のないことで、天然のアユは急流で餌を探して成長している。養成物は、波も余り立たぬ池の中で、投げられる餌を食べて成長する。そこで姿は立派でも天然物とは雲泥の差である。プールで習う水泳も自然の海や川では養成のアユのようなものではなかろうか。

養成アユは形こそ整っているが味の点では天然物とは比較にならぬ。天然のアユは、川の石についている水垢（ミズアカ）（硅藻（ケイソウ））を食べるので香りがよい。アユ食べて腹を食わねばアユ食うな。と、いう言葉があるが、好きな人は頭からかぶりつく。然し養成物では人工の餌を食わせている。従って腹に餌の残っているものを知らずに食うと、全くひどい目にあう。また養成アユで太り過ぎたものは、香りは止むを得ぬとしても、脂肪が多くてアユ好きの人達を失望させる。これは学問上、同一種の魚であるので、味は悪くても文句のつけようが無い。

ところで先年仲間と上高地の五千尺旅館に泊ったことがある。夕食の膳に塩焼の小魚が出た。上高地に来る連中は、河童橋の上から溪流に泳ぐイワナを見て喜ぶ。我々も同様であったが、そこで食膳に出た魚を仲間はイワナと思い込んだらしい。或男が女中に、これはイワナかと聞くと、女中は心得たもので、皆様はそうおっしゃいます。と、澄まし顔。そこで水族館長この魚の名はときた。見れば小さい虹鱒（ニジマス）に違いないが、今、虹鱒といったのでは皆んな失望するそこでイワナによく似ているというと、皆んなふーんといって満足顔、翌日あれは虹鱒だったといったが、そうか、やられたといって笑った。所によっては小さい虹鱒（ニジマス）がアマゴの身代りになることもある。世は代用品時代、魚だけ例外というわけにはゆかぬだろう。

現代彫刻と古典

新谷映子
〈彫刻家・二紀会〉

カリフォルニア・シュナード・アートスクールでは、教授と学生

との関係は、日本に於ける冷たい厳めしさとは反対に、友人のような親しみの中に感情のふれ合いが見られた。少なくとも、私にはこう感じられる。

私の選んだコースは、彫刻だったが、まず最初に学内の設備を案内され、つぎに制作するにあたって、これ以外にどんな設備が必要かと個人的相談、またアドバイスをも受ける。クラスは約二〇人。個人個人に予算の許すかぎり新しい設備を設けるという理解の良さ。そして、私たちの教授は、音楽と木彫のコンビネーションの作品の現代彫刻家だった。教授は、学生に材料の選択自由を与え、木を幾つも寄せて扱うもの・鉄の溶接・ポリエステル・ガラス・キャンバス・その他マネキン人形・家具などの他にことさら珍らしい材料をさがし、その質感の中に制作意図を発見し求めるといった積極的な研究態度に至極ご満足の様子だった。新しい研究には、危険は起こりうると考えて良いといわれながら、学生のする実験を助言しながら見入いり、二、三度の爆発事故を起こしては、その都度余計に意欲を燃焼させる教授でもあった。

日本の美術大学ではとうてい望み得ない恵まれたシステムは、完成作品はもちろん個人のものであるが、一ターム（約二ケ月）に一人当り約四十弗の制作費が支給されることであった。そして、タームの終りには、学内で作品の配置構成を各自考慮したうえ、所せましと並べて作品の批評会をすることになっている。約四〇点もあったろうか。その作品一点ずつに、教授との対話・質問の場が展げられる。さながら、アメリカの現代彫刻展を見るような雰囲気。赤・青・白の星条旗に色どられた木箱も、また、サイケデリックな模様を立体構成し、同時に幻想的な東洋の香り、線香を焚くというのも出品されていた。その他、実にバラエティに富んだ作品である。学校は、学ぶところなりとは、教授は制作段階においての手段の良きアドバイザーであり、個人個人の良点・才能を抽出してくれる場であると思った。アメリカからイタリアに渡って、ローマに滞在し、ここでまた勉強する機会を得たがアメリカのような近代的な感覚とフリーさは、全く伺えなかった。

<エセドラの噴水（ROME）にて>

こちらの美術大学では、伝統中心主義を軸としアカデミックなデッサンから始まり、執拗なまでに人体を追究するのがすべてのようで、古典の美を誇る国柄としては当然のことと思われた。さすがに街かどにみられる数多い彫刻からは、その背後の伝統の重厚さ・すばらしさを感じ、中世からの街並みとの調和は見事なものである。けれども、私にとってはローマのそれより、枠のない自由な表現芸術が魅力的で心ひかれた。

港のこと

友岡　子郷

<俳　人>

「先生のたのしみはなに？」などときく生徒がいる。そんなとききまってこうこたえる。

「散髪をして、港へ行って、コーヒーをのむこと」

あまり脈絡のはっきりしていない話らしくて、たいがいはけげんな表情を見せる。

けれども、じっさいわたしは、ときどきそういうことをする。散髪をして襟首の風通しがよくなると、生まの風にあたってそのぐあいをためしてみたくなる。そこで港へやってくる。一服をかねてコーヒーなどのむ。

つまりこれらは、わたしにとっては、ごく自然な一つづきの事柄なのだ。港へやってくると、必ず埠頭の先にまで歩を運ぶ。むろんそこは、そこで路面がきれていて、よどんだ波がひろくうねっている。潮じみて重そうな艀が、あちこちに引き回されている。少し遠くに、外国船らしい船が思い思いに巨体を据えて、休日つづきのようなけだるい静けさを見せている。さらに遠くの沖に、海門がけむって見える。

そこで路面がきれているのだから、そこは一つの最終到着点なのだ。そこから先へは歩めない。しかし、じっさいはそこから茫洋とじつに多くのものがひろがりはじまっている。しかも、ひろがりはじまっているものは、今までのものとはまるで異質なものなのではない。当然なものが当然なように奥深くひろがっている。

到着点がじつは出発点であること。そういうことは、たとえば長い人生のあいだには、いくらも出くわす事実なのであろう。それにしても、こうまざまざと感じさせるものが港にはある。

○

「あなたと二人できた丘は、港が見える丘……」こんな歌がはやったのは、わたしの小学生終わりのころだったろうか。

そのころは終戦直後で、まるで食べ物がなくて、みんなひもじく色あせていた。

港には始終アメリカの兵士が出入りしていて、こどもたちも意を決してそこへ出向いた。はじめにおぼえた英語は、ギブ・ミーだった。パンパンと呼ばれる女性もずいぶん多かった。くちびるも尖った爪も、ペンキでも塗ったように厚く赤くて、みんなタバコを吹いていた。彼女たちの英語は、まずハローだった。ハローというと、兵士が近寄ってきて、すぐ抱きかかえるようにして立ち去った。

ギブ・ミーにしてもハローにしても、心底せつないことばである。大げさにいえば、このことばに、生きる欲求を託した。ライオンを仰ぐ子犬の目をちらつかせながらである。この港が、こういうせつないことばの氾濫から解き放たれたのは、いつごろからなのだろう。そして、解き放っていく力になったものは、いったいなにであったろう。

それはやはり、こういうせつないことばを使いもした、多くのわたしたちではなかったか。

○

港へ出かけるというと、なんだかロマンティックにきこえるらしい。たしかに港はロマンティックな場所だ。けれども、この世のことならぬ感じという意味でのロマンティックではない。多くの現実が時空をこえて寄り集まっているように感じられて、ロマンティックなのだ。

港へやってきて、風に吹かれていると、どうしてもいろんなことを感じたり考えたりする。

潮じみた艀。錆びたネコ車。倉庫の扉にはさまった縄。いつも打っている蒸気船の音。寄り添う男女。空にぬきん出たタワー。……昔日の港を思い、戦後を思う。詩を思い、教育を思う。そして、安保や沖縄のことを思う。

過ぎたものや今起こりつつあるものが入りまじって、波とともに揺り上げられ、揺り下げられる。際限のない空のひろがりの下で。到着点が出発点であること。考えれば、それは、わたしの今日であり、わたしたちの今日であるにちがいない。つまり、わたしたち自身が港である、ともいいうるのだ。

遠方測り知られず舷で林檎みがく